

column ①

# 地域とアート

山田 茂

画家。岡山生まれ。1999年～2004年までNYで活動。現在は玉野市の「駅東創庫」にアトリエ開設。国内外での作品発表、ホテル・マンション・企業などのコミッションワーク製作。主なアートディレクションとして、南北楽観主義-せとうち、岡山芸術回廊 入居者募集中、幼児のアート体験学習プロジェクト、玉野こども芸術アプローチなど。



2012年開催岡山芸術回廊・玉野会場「宇野港東山ビル」

## ギャラリーから地域へ

バブル崩壊後、民間企業の文化・芸術活動を支援するメセナ事業が著しく減少し、その後、少し回復したものの新たな芸術活動の受け入れ先として地方自治体が名乗りをあげている。その理由は、今日最も深刻な社会問題として地域格差問題があるからだ。地域復興策である産業などがなかなか有効に作用せず、新たな地域活性が求められている中で、近年、アートによる地域活性化が注目を浴びている。例えば新潟県・越後妻有『大地の芸術祭』や瀬戸内海の島々を舞台にした『瀬戸内国際芸術祭』などの大規模なアートイベントは数十万から数百万人という来場者数が発表され、経済効果は最大で百数十億円ともいわれている。その実績から、地域のアートに対する関心度が年々高まっている。

そしていまや、日本全国でアートイベントと呼ばれるものが林立されており、各自治体ではある程度の集客が見込め、費用対効果が高いイベントとしてまちおこしや地域活性化の起爆剤としても期待されている。

## なぜアートなのか

地域のイベントに「アート」という要素を取り入れることで、地域活性化に加え、文化活動としての面も加わり、助成金や補助金の申請がしやすくなる。また、アーティス

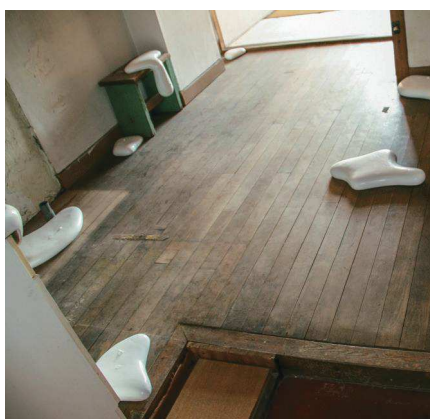
トも新たな活動の場が与えられ、交流人口も増えることから、地域の賑わいイベントの形として成立しやすい。しかし、「アート」を活用するのであれば、使う理由やコンセプトを明確に打ち出すことが重要であると考えられる。アートは美しいもので心地いいもの、そしていろんな楽しい体験ができるという認識だけでは大きな誤解が生じることを知っていただきたい。

『瀬戸内国際芸術祭』の総合プロデューサーである福武総一郎氏は「僕は現代美術というものは、時代や体制に対するレジスタンスのメディアだと思っています。瀬戸内の島々が抱える乱開発や不法投棄の問題など、美しい場所を犯したことに対するレジスタンスとして現代美術が存在するんです」と述べている。また、直島に作品が設置してある、光と空間を題材とした作品を世界中で発表しているジェームス・タレル氏は「アーティストは答えを示すのではなく、問いを発する人である」と述べている。アートは楽しいもの、美しいものだけではないのである。

また、アーティストは自身のフィルターを通して感じた、その地域の問題点や疑問点を作品で表現する。2013年の『瀬戸内国際芸術祭』では、宇野港界隈の建築の壁面にビルボードを設置して、写真家・荒木経惟氏の巨大な新作写真が展示された。写真は漆黒の背景に薄汚れた人形と極彩色の花々が組み合わさった写真だった。生と死をテーマにしてきた作家の作品だけあって、一部の市民からは「気持ち悪い」や「暗い気持ちになる」という声も少なからずと



宇野港東山ビル - 入居者募集中 - 空間プロデュース  
「印影の部屋 (清水直人)」



宇野港東山ビル - 入居者募集中 - 空間プロデュース  
「汁 (千葉尚美)」



期間限定でオープンした「純喫茶 東山」

もあったことは確かだ。しかし彼は宇野港を訪れて彼自身が感じた印象を、写真を通して表現したのだ。玉野を楽しい街にしたいと思っている私からすれば、それはとても厳しい戒めのメッセージとして私の目に飛び込んできた。玉野市の一住民である私は毎日この作品を観ることとなるのだが、日々私の心を否応なしに触発するのであった。しかしながら、それこそがアートの力であってアートたる所以なのである。

## 宇野港東山ビル - 入居者募集中

2012年に私がディレクションをした、アートイベント『岡山芸術回廊』の玉野会場「宇野港東山ビル - 入居者募集中」のコンセプトや背景について簡単に紹介する。

岡山県から依頼を受けた時、私の住む玉野市では「うのづくり」という組織が立ち上がって間もない頃だった。玉野市もまた、造船不況や瀬戸大橋開通の煽りを受けて、市の玄関口である宇野駅周辺の商店街は空き店舗が目立ち、住民は高齢化が進み過疎化の一途を辿っていた。そこで、「うのに住んで」+「つくる」を合言葉に、全国に宇野という場所を配信して、宇野を楽しみ、愛し、暮らしてくれる移住者を増やし、少しでも良いまちにしていけたらという思いで「うのづくり」は結成された。私も「うのづくり」のメンバーの一人として、岡山芸術回廊の玉野会場では「うの」という街の現在とこれまでの歴史、そして未来への希

望を配信できるようなイベントにしたいと目論んだ。

メイン会場として選んだのは、宇野港に面して建てられた「東山ビル」。このビルは宇野港界隈でもっとも古いビルの一つで、宇野港の繁栄と衰退を見続けてきた建物である。実は「うのづくり」が発足した時にこのビルのオーナーから、「まちのためにビルを有効活用してもらいたい」と打診されていた。ビルは4階建て30部屋のアパート兼テナントビルで、ビルの斜め向かいには宇高国道フェリーの発着場所であったため、全盛期にはビルの前の道路にはタクシーが何台も連なり、ビル内にある喫茶店やBARが深夜まで大変な賑わいだったらしい。そんな繁栄の時代も過去の話で、ビルには入居者は誰一人として住んでおらず、建物内はゴミの山で、いたるところに鳥の糞が蟻塚のように形成され、まさに廃墟ビルだった。

実のところ、私たちもこのビルの立地や昭和感満載の雰囲気の魅力を感じつつも、どのように利用するかを考えあぐねていた。

そこで、このアートイベントをきっかけにビルをもう一度復活させて、多くの人に宇野港の忘れ去られた歴史に目を向けてもらうと共に、イベント後にビル本来の用途に稼働できるようにしたいと考え、イベント・タイトルを「入居者募集中」として、イベント会期中にこのビルの入居者を募るという企画を立てたのである。

私は宇野に関係するアーティストと、「うのづくり」を通して実際に移住してきたクラフト作家など、11名の作

家に声をかけた。作家達は、このビルに刻まれた損傷を時間の痕跡として、イメージされる作品の展示や空間プロデュースを各部屋や各場所でおこなった。また、かつて喫茶店があった場所に、イベント期間中だけ「純喫茶 東山」を再びオープンさせた。

イベント期間中は、以前「純喫茶 東山」でウエイトレスをしていた女性や、客として訪れていた年配者など、かつての東山ビルを知る人が懐かしいということでたくさん訪れた。訪れた人たちから当時の貴重な話を聞くことができ、東山ビルのみならず、宇野港界隈の忘れ去られた歴史をもう一度思い起こせたことで、時代と共に埋没してしまった記憶に向けて供養ができたような気がした。

その後、東山ビルは移住者の手によりさらに改修を重ね、今現在では、ホステル、オフィス、ギャラリー、コーヒースタンド、ハンバーガーショップ、そして毎年夏に開かれる屋上ビアガーデンなど、様々な施設が入居する複合施設となり、宇野港の観光拠点としての一躍を担い、当初の狙いを遥かに上回る復活劇となったのである。

最後に、アートイベントの企画者側は、アーティストに全力で向き合って欲しい。それはアーティストの要求を全て受け入れるということではない。企画者側とアーティストは、そこで表現される作品についてしっかり討議することに大きな意味がある。

アートイベントの成功指標として、しばし来場者数が増え、取り上げられるが一過性のお祭りのイベントであっても、アート作品を通してその地域に一石を投じることができるのならアートイベントとしてそれはある意味成功だったと言えるのではないかと私は思う。

### インフォメーション

岡山芸術回廊

<https://okayama-kairo.tumblr.com/>



玉野会場

<https://okayama-kairo.tumblr.com/tagged/玉野会場>



東山ビル HIGASHIYAMMA BUILDING

<http://hym-bldg.com> ※スマホ非対応



「宇野港 東山ビル メイキング」(YouTube映像)

[https://www.youtube.com/watch?v=x\\_R1IGQGZtM](https://www.youtube.com/watch?v=x_R1IGQGZtM)

